

プラチナ未来人財育成塾

未来のリーダーを育成することを目的として開催されている「プラチナ未来人財育成塾」。毎年各中学校の代表生徒を派遣しています。広報きくち11~3月号で参加した生徒の報告書を紹介しします。

参加報告

プラチナ未来人財育成塾に参加して

旭志中学校1年 青木朝陽さん



今回は、5人の先生方に講義をしていただきました。その中で3人の先生の講義について発表したいと思っています。

1人目の先生は、東京大学の准教授でプラチナ未来人財育成塾の塾長でもある菊池先生です。菊池先生は持続可能な社会を目指すために私たちがすべきことは何か。それは「would doすべきことを自分で考える」「cand do.できる」「should do.周りから言われたことをすべき」この3つを大切に、行動していくことが重要だと学びました。

次に「授業から講義」への変化について考えました。私は今中学生で、これから高校、大学または就職という形で人生を歩んでいくと思います。高校生になると、主な5教科はもっと範囲が広がり、大学になるとさらに色んな分野がでできます。それを学んでいくのはすごく大変だと思います。私はあまり勉強が得意ではありませんが、学ぶことで知識を得て自分の考えや見方が変わっていくと思います。だから、知識を得る中で自分と向き合っていくことが大

切だと感じ、考えさせられました。

2人目の名古屋大学の天野教授の講義では省エネや再生可能エネルギーについて学びました。私は日頃からエコバックを使用したり、エアコンの設定温度を下げすぎたりしないようにしています。1人だけが意識しても温暖化を防ぐことはできないので、みんなが温暖化を防止することが大切です。

日本では、太陽光による再生可能エネルギーが年々増えています。身近な所でもソーラーパネルを見かけることが多くなりました。日本は平地が少なくソーラーパネルや風車は山などに設置されています。しかし、日本には自然災害が多く地盤がゆるみ、大雨などによる土砂崩れなどが起きる可能性が高くなります。また、環境への影響もあるのではないかと指摘されており、環境も保護していきながら再生可能エネルギーを進めていく必要があるのです。設置技術を高めていくことが大切だとグループワークで話し合いました。

3人目の先生は、宇宙飛行士の山崎さんの講義で、心に残ったことは「宇宙を知ることが、地球を知ること

と」という言葉です。宇宙からは、地球の星空や雲、オーロラ、空気の層などがきれいに見えるそうです。私は宇宙からしか見ることができない地球があるので、宇宙はどのような状態なのか、宇宙には何があるのか知ることが、私たちが住んでいる地球のことももっと分かってくると思います。また、台風の目や違法で行われている森林伐採も見ることが出来ます。そのような事から私達は宇宙にある人工衛星などから見守られながら生活しているのだと思います。

私は、私達が生活に必要なものの技術を発展させていく中で、その技術で環境をこわさないようにするために技術と環境の保護を両立しなければならぬと考えます。プラチナ未来人財育成塾に参加して、有名な方に質問したり、お話ししたりした事がとてもうれしく良い勉強になりました。私はこれから色んな知識を得て、「can」できるを目標に生活していきます。

今回の四日間を感じた事や学んだ事をこれからの未来につなげて行きたいと思っています。

社会を明るくする運動

法務省が主催する「社会を明るくする運動」。市では啓発事業の一環で、市内の小中高校生を対象に作文を募集しました。広報きくち11~1月号で各部門の最優秀作文を紹介しします。

高校生の部最優秀作文

すべての人が活躍する社会へ、私ができることを探す大切さ

菊池農業高校3年 佐藤祈さん



昨年の6月、私は学校で、農福連携の実践型ネット販売事業というプロジェクトの募集用紙を目にしました。農福連携は、障がい者が農業を行うことを通して就労支援や自信を生み出すだけでなく、担い手不足や高齢化が進む農業において、働き手の確保に繋がる取り組みです。これに参加すれば、微力ながら役に立つことができるかもしれないという思いで、私はこの事業への参加を決めました。そこで、社会福祉法人の菊池愛会さんとの共同作業があり、入所されている女性の方とお互いに自己紹介をしました。まず私が「こんにちは。」と挨拶すると、彼女は「こんにちは。初めまして。何歳?」と尋ねました。「16歳。高校2年生。」と私が答えると、「名前は?」と尋ねられ、「私の名前は佐藤祈。よろしく。」と答えました。聴覚に障がいがある方だったので、私は、少ししかできない手話を用いてみました。すると彼女は私の手を見て「手話大丈夫?」

と嬉しそうに笑顔になりました。私は少し考えてから、「ちょっと...でも、難しい。手話、大丈夫じゃない。」と答えました。その後も色々尋ねたくても手話で表す方法が分からなかったり、彼女の手話のスピードが速くて読み取れなかったり、手話で「これ、手話分からない。」など、自分が伝えたくても分かってもらえない無力さを感じました。でも、私の下手な手話を見て、「手話、大丈夫?」と尋ねた彼女の嬉しそうな顔は、今でもよく覚えています。

私は彼女から、多くのことを学びました。口の動きで話の内容を読み取り、手話ができない人とは筆談で話をするそうです。それから私は、手話の世界がどういうものか、障がいがある方が活躍できる場所はどこなのか、もっと知りたいと思うようになりました。そして、障がいがある方の力になりたいと感じました。

来年開催予定の東京パラリンピックでは、水泳や球技、陸上競技、格闘技や馬術など22競技が行われま

す。過去のパラリンピックでは、障がいや病名を有することを感ぜせない技術やスピードなどで記録を出している方が多くいます。障がいを自分の個性として受け止め、スポーツを行う。そんな障がい者の姿を見ると、どんな人にも活躍する場所があり、どんな人にも色々な可能性があるので感じます。

私は、農福連携事業に参加でき、障がいを持つ人と直接話す機会を得ることができたから、このような考えを持つことができました。自分だけが良ければいい。自分の見えていない世界だけがうまく動けばいい。このような考えでは、社会は歪んで、そして衰退していくと思います。すべての人が輝ける場所を持つために、まずは自分のできることを具体的に考えることが、高校3年生の社会に出る直前の私にとって、とても重要な大きなことに思えます。

私は以前から、将来、働きながらもボランティア活動に取り組みたいと考えていました。自分の考えを行動に移し、これからも社会全体に目を向けていきます。